

カーレル・ファン・マンデル『絵画書』より(2)

幸福 輝

fol.203r 「ブリュージュの画家ロヒールの伝記」

幸運と財産は常ならずという世の習い通りに、名高いブリュージュの町は、1485年にここからスライスとアントウェルペンへと商業が移動したことにより、齒車が狂いだし、衰退していく。それ以前の時期、というのは、ヤン・ファン・エイクの時代とその後のことであるが、ヤン以外の賢明で素晴らしい幾人かの人物が存在した。その中のひとりにロヒールと呼ばれるものが出て、彼は前述したヤンの弟子となった。しかしながら、それはヤンがすでにかなり高齢になってからのことであつたように思われる。というのは、ヤンは油絵具に関する技法と発見とを高齢にいたるまで秘密にしており、彼が仕事をしている時は誰も近づくことが許されなかったからである。しかし、最後になって、彼は弟子であるロヒールにこの技法を伝えた。ブリュージュには、教会や屋敷を飾るロヒールの多くの作品が存在していた。彼は優れた素描家であり、彩色はとても優美で、油絵具でも膠や卵白のテンペラでも制作した。その当時、大きなカンヴァスに大きな人物像を描くのが一般的で、それはタペスリーのように部屋にかけるために、卵白のテンペラ、もしくは、膠絵具で描かれた。彼はこの手法における偉大な画家であり、確かに、彼の手になる驚くほどの賞賛と尊敬に値する幾点かのカンヴァスを私はブリュージュで見つめた。そのような大きな作品を制作するためには、素描力と理解力とが必要である。それがなければ、全くひどいことになるか、あるいは、小さいスケールではあまり目立たない魅力のなさが際立ってしまう。私は彼の死については何も知らないが、彼の名声はその卓越した作品を通して依然として生きており、それにより、彼の名前は不滅のものとなっている。

fol.203v 「ブリュージュの画家ヒューホ・ファン・デル・フースの伝記」

ある者が偉大な画家となって名誉と富を手に入れるのを見た親たちが、自分の子供たちに素描の練習をさせようとするのは変わったことではない。このような理由から、ヤン・ファン・エイクは多数の弟子を抱えていたのかもしれない。しかし、彼は弟子をとることに無関心だったようだ。それでも、この画家にはヒューホ・ファン・デル・フースと名付けられた一人の弟子がいた。彼は偉大な魂と知性を持っていたので、驚くような優れた画家となった。彼は師から油彩画法を学んだ。彼の作品は1480年頃以降のものである。ゲントのセント・ヤーコブ教会には、最も深遠で卓抜な技倆に満ちた小さな作品が柱にかかっていた。それは彼の手になるワウテル・ホルティエという人物の墓碑画で、中央のパネルには正面向きの聖母子像が描かれていた。聖母は高さが1.5フィートにも満たないものだが、この像や地面の小さな植物や石に観察される端正な描写に対し、私は大いなる賞嘆の気持ちをもって何度も接したものだ。特に、賞賛すべきはマリアの相貌に認められる優雅な謙譲さである。古の画家たちは、宗教像にこのような尊厳に満ちた敬虔さを与えることにことのほか秀でていた。同じ教会に、芸術性に富む「キリスト降架」を描いたステンド・グラスの窓もあったが、その構図が彼のものであったか、彼の師であるヤンのものであったかは定かでない。ゲントの聖母マリア兄弟団の修道院にもヒューホによる板絵があり、そこには聖女カテリーナの伝説ないしこれに関連する物語が描かれていた。それはこの画家の若い時の作品であつたかもしれないが、巧みに描かれた美しい作品であつた。もうひとつ、特別に素晴らしいヒューホの手になる別の作品があり、それは正当なことに、全ての画家や聡明な人々たちから変わらぬ高い賞賛を得ている。その作品は、ゲントのマイデ橋近くの水に囲まれたヤーコブ・ウェイテンスという名の家にあり、マンテルピースまたは暖炉のための壁に油絵具で描かれたものである。それはダヴィデとアビガイルの出会いの場面を描いている。この作品に描かれた女性たちの中に見られる偉大な慎み深さや、彼女たちの賞賛に値する感じのよい相貌はここに特記されるべきものである。こうした上品さはとても宮廷的に見え、それを真似させるために、当代の画家たちは子女をそこに送らなければならないほど

だった。さらに、馬に乗るダヴィデもまた大変に威厳に満ちていた。要するに、この作品は素描、構想、身振り、感情表現などすべてにおいて際立っていた。というのも、ここではまさに愛情が介在し、クビドが母ウェヌスと三美神と共に画家の筆の運びを導いたように思われるからである。ヒューホはまだ独身であり、彼が熱烈に愛し、その作品の中に肖像を描いたその家の娘に求愛したのだった。この芸術性に溢れた作品に敬意を表し、リュカス・ド・ヘーレは次のような頌歌を書いた。ヒューホに描かれた女性のなかの一人は、その詩の中で次のように語っている。

ソネット

有名な芸術家であるヒューホ・ファン・デル・フースによって、
私たちはまるで生きているかのように描かれた。
彼が全ての名誉と美德をもって、私たちのひとりに抱いた愛情のために。
その素晴らしい容貌を見れば、彼がどのような愛に従ったのかわかるだろう。

ブラクシテレスがフリユネをどんなに愛していたかは、
彼女の彫像を見ればよくわかるように、
画家の愛した女はここにいる私たち全てを上回り、
均斉のとれた美しい姿の彼女は、画家の手によって最も気高く賛美された。

とはいえ、他の男と女も馬とロバも巧みに描かれ、
どこにも咎められるものはない。
退色することなく、そして、はっきりと純粋に扱われている。

要するに、作品のすべてが整然としていて、よくできている。
私たちに欠けている唯一のことは、話ができないことだけである。
これは女である限り、必ずそなわっていることなのだけれど。

この非常に成熟した画家の作品として、ブリュージュには他にも見事な幾点かがあるようなのだが、はっきりとは知らない。ブリュージュのシント・ヤコブ教会には、別なもうひとつの絵画がある。それは彼が制作したなかでも最も際立ったもので、まさに最高の作品のひとつであると信じられている。それは「磔刑」を描いた祭壇画であり、聖母と他の事物が処刑者たちと共に描かれている。それはとても生き生きとした描写で、普通の人はもちろんのこと、芸術に通じたすべての人々を喜ばすような精励さをもって描かれた。その芸術性ゆえに、この絵画はイコノクラスムの心無い狂信のなかでさえも守られた。しかし、その教会は新教徒の説教に使われ、黒地に金文字で十戒を書くためにこの絵は使われた。名前を明らかにすることは差し控えたいが、これはある画家が助言し、自らその行為をおこなったのである。自分自身の芸術が正しいと思っていた者は、この作品を破壊し、壊してしまいたかったのだろうが、それは絵画芸術にとって偉大な不名誉と損失であっただろう。その者は涙に溢れた目でそのことを証言すべきであった。しかし、オリジナルの古い絵画層は堅く、そして金の絵具と黒の地塗りは脂っこい油と混ぜられていたので、皮のようになり、それをきれいに洗うことができた。そして、絵画は依然として存在し、損害を受けることはなかった。以上が、この優れた画家ヒューホについて私が集めることのできた全てである。私は彼がいつどこで死んだのかは知らない。しかし彼の高貴な技術のために、私は彼の名前をヘラクレスの妻であるヘベ、つまり、不滅のものとして推薦する。

fol.204r 「初期近代の様々な画家について」

高地および低地ドイツにおいて、われわれの職業には、これまで様々な高貴な芸術家や能力のある人物がいた。けれども、特に、われわれのネーデルラントにおいては、時と時代が名前以上の事績を残すことを許さず、著述家たちは歴史的著述において彼らを記念するようなことができなかった。しかし、その草創期から、ほとんどすべての版画家は同時に画家でもあったので、版画のあちこちに、彼らの残したものや多くのものが見られる。ゼーバルト・ペーハム、ザクセンのルーカス・ファン・クラナッハ、イスラエル・ファン・メッケネム、そして、「美しいマルティン」、すなわち、マルティン・シヨンガウワーなどなどである。これらの版画は、彼らが当時優れた画家でもあったことの証言で

ある。というのも、私は彼らの絵画でそれを指し示すことが出来ないからだ。しかし、今、ネーデルラントのある画家たちについては、彼らの作品と人生だけでなく、彼らが生きていた時代についても、私たちは断片的ないし部分的にしか知らない。こうした画家には次のような者たちがいる。第一に挙げるべきは、早くにブルージュに現れた傑出した巨匠であるハンス・メムリンクと呼ばれた画家である。ブルージュの聖ヨハネ施療院には、彼の手になる小さな人物像の描かれた小祭壇あるいは聖遺物箱があり、その素晴らしい技術ゆえに、幾度も純銀の聖遺物箱との交換を要請されてきたものだった。この巨匠はピーテル・ブルピュスの時代より前にブルージュで活躍していた。この作品が展示される祝祭日に、ブルピュスはよくこの作品を見に行った。そして、彼はそれをいくらか見ても飽きることはなかったし、賞賛を惜しまなかった。このことから、このメムリンクという巨匠がどんなに卓越した人物であったのかが推定できる。ゲントではヤン・ファン・エイクの少し後、精緻な描写法を身につけたヘーラルト・ファン・デル・メールがいた。ルクレティアを描いた彼の手になる完璧な絵画があり、愛好家リーフェン・ターヤルトの手でゲントからオランダへともたらされ、そして、最終的には傑出した美術愛好家であるアムステルダムのヤーコプ・ラーファルトの所有となった。ヘーラルト・ホーレンバウトもまたゲントにすんでいた。後年、彼はイギリスのヘンリー8世の宮廷画家になった。彼の作品のひとつが聖ヨハネ教会の聖歌隊席の左手にある木彫祭壇翼画である。この作品はリーフェン・ヒューグノスという名前の聖バヴォ大修道院長によって注文された。翼画の『鞭打ち』はとてつもなく巧みに描かれ、鞭打つ人の憎悪に満ちた残酷さやキリストの耐える様子がはっきりと描かれ、また、その下には鞭を懸命に編んでいる人物が見える。もうひとつの翼画には「十字架降下」が見られ、そこでは大なる悲しみを見せるマリアとヨハネが描かれている。遠方には、灯りを持って墓へとやって来る3人のマリアがいるが、その灯りで洞窟のような墓が闇の中でかすかに見え、そして、彼女達の顔を照らしている。岩の墓の向こうには風景が広がっている。これらの翼画は、イコノクラスムの間、ブリュッセル生まれの美術愛好家マルテン・ピールマンによって守られ、買い戻された。後に、彼はそれらの作品を購入にかかったのと同じ金額で教会へ返却した。ゲントには、また、ヘーラルトの別な作品がある。それはフレイダフマルクト(金曜日市場)に位置する亜麻布屋にあるトンドで、両面に絵が描かれている。一方には石の上に座ったキリストが描かれ、彼はいばらの冠をいただき、鞭で頭を打たれている。裏では数多くの天使に囲まれた聖母子が見える。また、ゲントには、いくぶん後にリーフェン・デ・ウィッテが登場する。彼は良い画家であり、建築と遠近法について豊かな知識をもち、遠近法による絵画を多く描いている。彼の手による重要な作品は、キリストと姦淫の女である。ゲントのシント・ヤン教会では、彼の下絵による美しいステンドグラスが何枚も見られる。また、かつて、ブルージュにはランスロート・ブロンデルがいた。彼は若い頃はレンガ職人であった。それゆえ、彼が画家になったとき、その作品には、常に署名の代わりに左官ごてをその作品に残した。この画家は建築と古代の廃墟、夜の火といったことを描くことに驚くべき豊富な知識を持っていた。彼の娘は後にピーテル・ブルピュスの妻になった。また、ブルージュにはハンス・フェレイケがおり、彼は、「小さなハンスちゃん」と呼ばれ、風景画をとてつもなくさりげなく、美しい自然そっくりに描いた。それほど大きいものではないが、時に、彼は風景の中に聖母を描くこともあった。また、人物描写と肖像も得意であった。というのも、ブルージュ郊外にある私の叔父クラウベ・ファン・マンデルの「青い城」にあるこの画家の手になる扉のついた三連祭壇画を私は見たことがあるのだが、そこには、叔父のクラウベは妻や子供たちと一緒に描かれて、そして、中央のパネルには聖母マリアが風景の中に描かれている。また、かつてヘーラルト・ファン・ブリュッヘ(ブリュージュ)という画家もいたが、この画家については十分な情報が無い。ピーテル・ブルピュスによって、この画家がすぐれた画家として高く賞賛されたという以上のことは知らない。ハールレムにも、かつてヤン・ファン・ヘメッセンという画家がいた。彼はハールレム市民で、彼の描法はより古い画家たちに近く、当代の絵画とは異なるところがあつた。彼は大きな人物像をとてつもなく丁寧かつ正確に描いた。彼の手になる作品として、エルサレムに進もうとしているキリストとその隣に立つ使徒たちを描いた作品がある。この作品はミッデルブルフの美術愛好家コルネリス・モニクスの家にある。またハールレムにはヤン・マンデインもおり、彼はヒエロニムス・ボッスに似た手法で、恐ろしい、あるいは、滑稽な表現に秀でていた。彼はアントウェルペン市から年金を受けており、同市で亡くなった。またハールレムではフォルケルト・クラスゾーンという画家があり、構図、素描力、筆遣いに大いに優れていた。彼の手になるカンヴァス画がハールレムの長官会議室にある。それらは当世風というよりは、より古い時代の様式で構想され、描かれている。彼はガラス画家や他のことのために、

驚くほど安い価格で速くの下絵を描いた。アントウェルペンではヘッセン出身のハンス・デ・ドイチャー（あるいはジンガー）がいる。アントウェルペンのケイゼルストラートにあるカレル・コケール邸には、この画家による水彩画によってすべての装飾がなされた部屋がある。そこにはたくさんの樹木が描かれ、ライムやオーク、そして他の木が見分けられる。彼はしばしばタピスリー制作者のために描いたが、左右反対に絵を描くのはあまり得意ではなかった。彼は1543年にアントウェルペンの画家組合にはいった。1535年に、カンペン付近に住んでいた「小さなハンスちゃん」と呼ばれていたハンセン・ファン・デル・ビュルフがアントウェルペンの画家組合にはいった。聖母教会の魚売りの祭壇は彼の手になるものである。その作品では魚つりに専念しているベテロ、また、前景にはイエスと美しい木が見られる。海の嵐の場面もまた彼の手によって描かれた。それ以前にはアールト・ド・ベールがアントウェルペンに住んでいて、彼は1529年に画家組合に入会した。彼はガラス画家のために多くの下絵を描いたが、驚くほど才能のある専門家である。また、ヤン・クランセもいた。聖母教会の聖餐礼拝堂には、彼の手になる足を洗うキリストを描いた大きなキャンバスがあるが、それは見事な作品である。彼は1523年に画家組合に入会した。アムスフォールトからやってきた画家ランプレフト・ファン・オールトは1547年にアントウェルペンの画家組合に入会しているが、良い画家で、また、建築家でもあった。ミヒエル・ド・ガストは同じ組合に1558年に入っている。彼はたくさんのローマの廃墟や景色を写生し、しばしばこれらの主題を彼自身が考案した他の主題と組み合わせで描いた。彼がなにかを描くと、それはただちにこの画家独自の表現となった。アントウェルペンには、また良い水彩風景画家であるピーテル・ボムがいる。彼は1560年に画家組合に入っている。岩山を見事に表現した画家であるコルネリス・ファン・ダーレは1556年に同じ組合に入っている。こうして述べてきたことが私の知っているすべてであり、ここで記した以上の情報をもっていない。

fol.205v 「ハールレムの画家アルベルト・ファン・アウワテルの伝記」

われわれの芸術の中で最も優れた画家たちについて研究し、それらをその起源から順序良く整理するために、まず、最も早い時期の画家を取り上げることにしよう。このハールLEM出身の画家アウワテルに関して信頼できる証拠を入手した時、私がまず驚いたのは、彼があまりにも早い時期に熟達した油彩画家になったということである。というのも、ある疑いの余地のない細部の事実から確認されるのだが、この画家はヤン・ファン・エイクの時代までさかのぼると信じられるのである。実直な老画家であるハールレムのアルベルト・シモンズゾーンは、当時70歳ほどだったハールレムの画家ヤン・モスタートの弟子であり、そして、それから1604年の現時点まで60年が経つので、モスタートが生まれたのは約130年前であることに間違いないと述べている。アルベルト・シモンズゾーンは記憶力のいい人物なのだが、他方、彼はモスタートがハールトヘントット・シント・ヤンスもこのアルベルト・ファン・アウワテルも全く知らないと言っていたと述べている。事実、アルベルト・ファン・アウワテルは、このアウワテルの弟子だった有名な画家ハールトヘントット・シント・ヤンスに先立つ人物であった。だから、私はどれほど早くからハールLEMで油彩画が使用されたかは、読者自身ももっとよく調査し、判断するに任せることにしたいと思う。ハールレムのフローテ・ケルク（大教会）の主祭壇の南側に、アウワテルの手になる祭壇画があった。それはローマ祭壇画と呼ばれ、ローマへの旅行者または巡礼者によって制作が依頼されたものだった。中央パネルには、等身大の全身像で描かれた聖ベテロと聖パウロの像があった。すぐ下のプレデッラには、様々な旅行者または巡礼者が描かれた優美な風景画が描かれていた。動き回る者もいれば、休息する者、食事をする者、酒を飲む者もいる。この画家は容貌や手足、また、衣服の表現のみならず、風景描写においても優れていた。このことは、卓越した風景表現が最も早く生まれたのがハールLEMであると言いつたことでも想起させるだろう。それほど大きくはないが、この画家の手になる縦長のくすんだ彩色の作品を私は見たことがある。それは《ラザロの復活》を描いたものである。他の称賛に値する芸術作品とともに、この画家の真筆作品は、ハールLEMの包囲と占領後にスペイン人によって略奪された。《ラザロの蘇生》は当時としては稀な美しく正確な裸体像であり、素晴らしい出来であった。その作品も、そこに描かれる柱も幾分小さいものではあるが、印象的な神殿建築がその中に登場している。一方には使徒たちが、反対側にはユダヤ人たちが描かれている。そこにはまた、女性たちの姿も見えたが、精妙な描写である。その後ろに、聖歌隊の小さな柱の間から中を覗く人々の姿も見えた。ホームスケルクはこの最も技巧に富む作品を熱心に見るために何度も通い、見飽

きることがなかった。彼はその所有者である彼の弟子に次のように言った。「君、これを作った人たちは何かを食べたのかい?」この問いで、これだけのものを作るために、彼らが恐ろしい量の時間を費やし、心身を捧げたにちがいないということを言いたかったのである。これがこの古い画家に関して時間と時代を超えて、忘却の淵から我々に伝えられたすべてのことである。

fol.206r 「ハールレムの画家ヘルトヘン・トット・シント・ヤンスの伝記」

白く冠雪した荒れ果てたアルプスや、あるいは他の高い山々から、水が小さな小川となって様々な場所から集まり、ゆっくりと停滞し、広い水路や水底に集まり、そして、最も雄大な海に注ぐ様子を見るように、われわれの芸術はあちらこちらで生み出され、高潔で力強い精神の作用で徐々に完成に向かっていった。なかでもハールレムのヘリット(トット・シント・ヤンスと名づけられた)が絵画芸術に身を捧げたことは、絵画という高貴な業を高めることに貢献した。というのも、あまりにも早い時期に美と魅力に対して人々の目を向けさせたことで、彼は絵画により多くの名誉と価値の重大さを与えたからである。まだ若いヘルトヘンが先に述べたアウワテルの弟子であった時、私の考えるところでは、純粹さと正確さ、そして、仕事の鋭さにおいては師と同程度であったが、雄渾な構想、構図、人物表現、感情表現の点では勝っていた。ヘルトヘンはハールレムで自身の名前の由来ともなった聖ヨハネ修道会の聖職者とともに暮らしていたが、修道会の一員ではなかった。ここで、彼は著名な大祭壇画である《キリストの磔刑》を制作した。その祭壇画は両面に絵が描かれており、翼画もまた大きかった。片翼と中央パネルは、偶像破壊運動、または、その町が包囲された際に破壊された。唯一残ったパネルは半分に切断され、現在は新しい建物の主室にあり、司令官に属す2点の美しい作品になっている。翼画外面の《洗礼者ヨハネの骨の焼却》は奇跡または特異な物語を描いているが、もう一方の《キリストの死への哀悼》ないし《十字架降下》は、深い悲しみを浮かべた数人の弟子たちと使徒たちをとまなう場面で、横たわるキリストの死体が自然に描かれている。特に、聖母マリアはこれ以上ないほどの悲しみを見せている。悲嘆の表情を見せるマリアは、悲しみに耐えながら静かに座っている。その抑制された悲しみの表現は、我々の時代の最も偉大な芸術家たちによって高く賞賛された。彼の手になる作品は、ハールレムの郊外の修道院にも残されていた。しかし、それらは、戦争または偶像破壊運動で破壊された。しかし、ハールレム大聖堂には彼のもう1枚の絵画があった。それは南側に掛けられ、丁寧に扱われてきた。天才アルブレヒト・デューラーがハールレムに滞在し、彼の作品を感心して眺めた時に、「実際のところ、彼は母親の胎内にいる時にすでに画家だった」と述べたような画家であった。すなわち、彼は、まるで自然の女神によって、すでに生まれる前からその未来を運命づけられ、選ばれた画家だったのである。彼はおよそ28歳という若さで死去した。

fol.206r 「画家ディルク・ファン・ハールレムの伝記」

古く、かなり早い時期においてさえ、ネーデルラント全土の中でたいへん優れた、最も素晴らしい画家はホラント州のハールレムに住んでいたということが語られてきた。それは、そのような早い時期に、先に言及された画家たち、例えば、アウワテルやヘルトヘン・トット・シント・ヤンスといった偉大な巨匠たちがすでに活動していたことによって証明することができる。そして、ディルク・ファン・ハールレムもまたこのような画家のひとりである。私は彼の師が誰であるのかを明らかにすることは出来なかった。彼はハールレムのクライス通りに住んでいたが、そこは幾つかの人物頭部の浮き彫りが並ぶ古代風なファサードが見られる孤児院からそれほど遠くはなかった。しかし、彼はブラバント地方のルーヴェンにも住んだように思われる。というのも、私はレイデンにある彼の2つの翼画のついた作品を見たことがあるのだが、その中央部には救世主の顔が、左右のパネルの一方には聖ペテロが、もう一方には聖パウロの顔が描かれ、その下には素晴らしい金文字でラテン語が書かれ、それは次のような文章だったからである。「キリスト生誕から数えて1462年、ディルクはハールレムに生まれ、この作品をルーヴェンで制作した。彼がルーヴェンの地に安らかに眠り続けますことを」。これらの顔はおよそ実物大で、非常に丁寧に、しかも正確に描かれ、髪やひげも見事な出来ばえだった。これはヤン・ヘリッツゾーン・バイテヴェフ氏の家で見ることができるが、私が言及できる彼の作品はこれだけである。しかし、それはこの画家ディルクがいかに優れており、その時代にどのような活動をおこない、偉大で完璧な作品を描いたかを証明するに充分であ

る。それはアルブレヒト・デューラーが誕生するよりずっと前のことなのだが、それにもかかわらず、ごちなく、あまり魅力がないように見える当代の様式とはかなり異なっていた。ランプソニウスは、その詩においてディルクに次のように呼びかけている。

我々に加わってください、ディルクよ。祖国は、有り余る賞賛をもって
あなたの手を天にまで持ち上げたりはしない。
結局、万物の母である自然それ自身も、
あなたが知識と美しい人物像によって
自然を超えてしまうことを恐れ始めるのだから。

fol.206v 「ブリュッセルの画家ロヒール・ファン・デル・ウエイデンの伝記」

絵画の歴史において、名誉を受けるに値する画家としてロヒール・ファン・デル・ウエイデンは特に記憶されねばならないし、無視されてはならない。彼はフランドル出身であるか、あるいは、少なくとも両親はフランドル出身であった。われわれの時代に先立つ、美術がまだ暗闇に覆われていたごく早い時期に、ロヒールはブリュッセルで叡智の光を灯した。その光は、母なる自然がロヒールの高貴な精神に分け与え、大きな賞賛を呼び醒まし、同時代の美術家たちの目を開かせた。というのも、彼はわれわれの美術を大きく変革し、構想力と実地の制作において、構図においても、人物像の身振りにおいても、より完璧な外観を提示したからである。彼は、内なる欲求に従い、つまり人々が悲しんでいるか、怒っているか、あるいは嬉しがっているのかを主題に合わせて描いたのである。永遠の記念碑として、彼の手になるたいへん有名な作品がブリュッセルの市庁舎に見られる。そこには、裁判所あるいは裁判に関連する四つの物語が描かれている。そこで、特に素晴らしく注目すべきものは、病気でベッドに横たわりながら、罪を犯した息子ののどをかき切ろうとする老いた父親を描いた作品である。歯ざしりしながら自分の息子に無慈悲な手でおぞましい正義を働く父親の姿が、とても個人的に描かれている。さらに、法の当然の経過として、この父と息子の両者がともに目をくりぬかれている場面を描いた作品もある。そしてそれ以外にも、見るべき素晴らしい多くの作品がある。こうして、博学なランプソニウスはそれらの作品にいたく感動し、ネーデルラントの平和の確立のために『ヘントの平定』を書いている間、何時間もこれらの絵を見るのを止められず、よく言ったものだった。「ああ、偉大なる画家ロヒールよ、あなたはなんと人だったのか」と。ランプソニウスはそのような重要な著作の執筆に没頭していたにもかかわらず、このような言葉でロヒールを讃えていたのである。また、ルーヴアの聖母教会に、ロヒールの手になる《十字架降下》がある。そこでは、二台の梯子の上に二人の人物が描かれ、彼らは麻衣かあるいは屍衣にキリストの死骸を包もうとしている。画面下の方には、彼を抱きかかえようと、アリマテアのヨセフや他の人々が立っている。泣きながら座る聖母マリアの様子が最も胸を打つ。彼女は失神しているように見え、その後ろにいる聖ヨハネに支えられている。画家ロヒールによるこの絵の原作は、スペイン王に送られる途中に船とともに沈んでしまった。しかし、引き上げてみると、しっかり梱包されていたためにあまり損傷を受けておらず、膠がやや緩くなっただけであった。この作品の代わりに、ルーヴアンの人々は別の絵を受取った。それは原作の模写で、ミヒール・コクシーの手になるものであった。これによって、ロヒールの絵がいかに優れたものであるかを判断することが出来る。彼は女王や偉大な著名人たちの少なからぬ数の肖像画をも描いたが、そのために彼は穀物によって代々の収入を得た。これで彼はたいへん裕福になり、貧しい人々のためにたくさん慈善施設を創設した。彼は粟粒熱が流行する時代に亡くなったが、それは英国病と呼ばれ、国土の大部分を破壊し、とても多くの人々の命を奪った。それは1529年の秋のことであった。このロヒールについて、あるいは、彼のために、ランプソニウスは次のように語りかけている。

ロヒールよ、君の時代に通用するたいへん多くの美しいものを描いた
君をいくら褒めても充分ではない。
これらは確かに、この啓蒙された時代においても
いまだに全ての画家の目を向けさせるに値する
(彼らが見る目をもっているのなら)。
その証拠として、ブリュッセルの裁判所の絵画がある。
それは高潔な正しい道から逸脱していこうとするあらゆる不正義に警告を発する。

そして、君が自らの筆によって得た富を、
飢えに耐える貧しき人々の安寧のために分け与えようとする君の最後の意志を、
どうして人々の記憶から消すことが出来ようか。
君はここに有る持ち物を、世界へと預けた。
それらは時が経つうちにあとかたもなくなるかもしれない、
しかし、君の美しく、卓越した君の行いは記憶され、
それは汚されることなく、永遠に天上に輝くであろう。

fol.207r 「ワーテルラントのオースターネン出身の優れた画家ヤーコブ・コルネリス
ゾーンの伝記」

アムステルダムという最も繁栄した都市には、われわれの絵画芸術において高く誇るべき
き少なからぬ理由がある。絵筆の扱いにおいて偉大な巨匠であったワーテルラントの
オースターネン出身の尊敬すべき高名な画家、ヤーコブ・コルネリスゾーンという非常
に素晴らしい人物がここに住んでいた。私は彼の生年月日を知ることはできなかった
が、彼は1512年にはヤン・スコーレルの二人目の師匠であった。その当時、すでに
ヤーコブ・コルネリスゾーンは芸術に熟練しており、また、すでに成長した子供たちがい
て、その内のひとりはおよそ12歳で、その事から彼の年齢や生年月日をかなりはっきり、
もしくは大ざっぱには推測することができる。彼はワーテルラントのオースターネンと
いう村に生まれた。彼が農民の間で生まれ育てられたにも関わらず、どのようにして芸
術にたどりついたのかということはわからなかった。私が知っているのは、彼はアムス
テルダムで暮らし、その生涯をアムステルダムで終えたということだけである。アムス
テルダムのアウデ・ケルク(旧教会)には、この画家によって巧みに仕上げられた《十字架
降架》の印象深い祭壇画があり、非常に芸術的かつ正確によく描かれている。その中
には腕くマグダラのマリアがいて、地面に広がるその衣服には多くの襞と折り目が見え、
彼のいつものやり方で、布は全て実物から写生された。同じ場所に、とても芸術的に
仕上げられた《7つの善行》があったが、これらはイコノクラスムの間にほとんど失われ
てしまった。問題のパネルのわずかな遺物が、大熊座の看板のあるハールレムのコル
ネリス・サイケルの家で見られる。それはこの画家の他の絵画と同じく、見る価値のあ
るものである。その中に、とてもみごとで緻密に仕上げられた《キリストの割礼》を描い
た傑作がある。その年記は1517年で、そのことから、彼が芸術活動をして光り輝いて
いた時代を知ることができる。ファン・デル・ネイエポルフ家に関して描かれた特に傑出
したこの画家の作品が、アルクマールのフォン・ゾネフェルトの未亡人のところにある。
それは聖母マリアたちが他の傍観者ととともに、キリストが死んで横たわっているのを嘆
き悲んでいる場面である。そこには非常に繊細に描かれた顔や裸体や布が見られ、
よく構成された作品である。感情表現もまた、よく描出されている。風景描写にも優れ
ているが、これは彼の弟子であったヤン・スコーレルが描いたものである。私は、アム
ステルダムのダム広場からそう遠くない所で、解体された、彼の手になる祭壇画の断片
を見たことを覚えている。それはキリストが十字架の上に引き上げられ、体をそらして
いる《磔刑》で、ぜひ見るべき素晴らしい作品である。彼にはまた、腕の良い画家で
あったバイスという名前の兄弟と、ディーリック・ヤコブスゾーンと呼ばれる息子がいた。
アムステルダムのドゥーレンには、ディーリック・ヤコブスゾーンによる様々な肖像画があ
る。中でも、手を挙げた男の肖像はとても際立った出来ばえで、ほぼ全ての人に感嘆
され賞賛された。それは、ヤコブ・ルーファルトがその肖像を切り取る許可を得るた
めに大金を申し出たほどであった。このディーリック・ヤコブスゾーンは1567年に70歳代
で死んだ。ヤーコブ・コルネリスゾーンもまた高齢で亡くなった。彼の手になる木版画も
残されている。すなわち、時々目にする9つの丸い受難伝であるが、とても念入りに構
成され仕上げられた作品である。そして他に、非常に精緻に描かれた9点からなる円
形の受難伝もあり、長方形の受難伝木版画もあった。さらに、精妙に描かれた9点の
騎馬人物像、すなわち9勇士を描いた木版画があり、それらは非常に生き生きと表情豊
かに描かれた。

*本翻訳は、科学研究費基盤研究B(研究代表者:尾崎彰宏)「カーレル・ファン・マンデル『北方
画家伝』の成立と影響に関する比較芸術論的研究」の成果の一部である。